

新型コロナウイルスのため、FWAは9月末まで例会をはじめすべてのウォーキングを中止しています。しかし、健康維持のために三密に留意して行う個人のウォーキングは、むしろ奨励されています。コロナを想定して作成したわけではありませんが、FWAには「バーチャル&リアル東海道五十三次を歩く」というパスポートがあり会員の方には配布しています。東海道五十三次というと、十返舎一九の「東海道中膝栗毛」(享和2年(1802)出版)が、まず頭に浮かびます。ご存知、弥次さん、喜多さんが道中、品の悪い悪戯や失敗、女と見ればからかい口説くドタバタの旅、伊勢神宮まで14日間、454km歩くという話です。江戸時代、世の中が落ち着くと庶民の間では伊勢参りが盛んになりました。文政13年(1830)には一年に約500万人もの人が訪れたという。当時の人口は約3,000万人と言われたので、6人に1人もの人がお伊勢参りをしたという驚くべき数字です。(注:1)弥次喜多は江戸から伊勢神宮まで一日平均35kmのスピード、弥次喜多はお籠や馬にも乗りましたが、当時の人々は、平均すると1日約10里(約40km)女性連れでも平均6里(24km)を歩きました。(注:2)これは会員の皆様に配布済みの記録帖の副読本として並行してお読みいただき、伊勢参りバーチャルウォークを少しでも楽しくしていただこうというものです。

1日目：早朝、江戸の長屋を立ち、戸塚宿(41km)の旅籠に泊まる。

江戸～戸塚宿：□□□□□□□□□□ 到着日： 年 月 日 **一マス 4km** になっています。

弥次さんと喜多さんはお揃いの浴衣で神田から出立。高輪あたりで忘れ物し残したことを思い出すが、借家を明け渡しての出立。大森は麦藁細工を名産にしている。川崎宿の名代の万年屋で奈良茶飯を食す。川崎宿のはずれで馬方から声が掛かり乗り、馬方の色事自慢を聞くうちに神奈川宿で馬を下りる。神奈川台の茶屋の女に誘われて酒肴、娘に愛想を言うが鼻であしらわれる。程ヶ谷の宿に入ると、留女が客引き、親子のふりをする押し売りされぬと言いつつ戸塚宿。宿の女は本当の親子と思ったか、いくら口説いても相手にせず。虱と隙間風で酔いがさめて散々な目にあう。



戸塚宿

江戸～品川宿：高輪大木戸札の辻：江戸の南の入口、石垣を築き夜は木戸を閉めて通行できないようにした。

泉岳寺：赤穂城主浅野内匠頭と義士たちの墓がある。品川宿～川崎宿：鈴ヶ森刑場：幕府転覆を企てた丸橋忠弥、天一坊、八百屋お七などが処刑された。大森には麦藁細工を名産にして売っていた。六郷の渡しはたびたび洪水で橋が流されたため元禄以降渡しとなった。川崎宿～神奈川宿：川崎宿には名代の万年屋：の名物、鶴と亀とのよねまんじゅう。鶴見の菓子屋「清月」が復刻。神奈川宿～程ヶ谷宿：神奈川台には広重の浮世絵にある田中屋(現在も営業中)、程ヶ谷宿～戸塚宿：権田坂：、最初の難所とされた。投げ込み塚：権田坂の上にある。「死すとも身内、旦那寺に連絡無用」とある者たちが葬られた。お軽勘平戸塚山中道行の場：舞伎「仮名手本忠臣蔵」で演じられ、戸塚山中道行の場。

2日目：戸塚宿から小田原宿(40km) 江戸から81km

戸塚宿～小田原宿：□□□□□□□□□□ 到着日： 年 月 日

藤沢に着き、みすばらしい茶屋で休む。茶屋の婆さんに団子を温めてもらおうとして灰だらけにされる。籠に乗り、駕籠かきとの会話で平野孫七の話(FWA,HP 遊興のまち藤沢参照)、馬入の渡し渡船場の人になんという川か聞いても分からない鳴立沢で西行の草堂のお参り。酒匂川を越え、小田原宿へ。道の両側は留女。



宿の風呂は五右衛門風呂、弥次さん入り方が分からず、蓋をとって熱い思いに。喜多さん入浴中、飯盛り女に 200 文を前払いして話をつけた弥次さん、喜多に自慢して便所に立った先に、飯盛り女に喜多さんは梅毒だとか、うそ八百を並べて邪魔止する。

戸塚宿～藤沢宿：遊行寺、永勝寺の小松屋の墓地の一角に飯盛り女たちを供養した墓がある。藤沢宿～平塚宿：お菊塚：番町皿屋敷のお菊の墓標。断罪として処刑されたため、父親は墓をつくらなかった。平塚宿～大磯宿：虎御前の化粧井戸：曾我兄弟の兄、十郎祐成との悲恋が有名な虎御前が化粧水をこの井戸から汲んだと伝えられる大磯宿～小田原宿：嶋立庵。酒匂川：3月5日から10月5日までは徒歩渡し。冬季は仮の土橋が架けられた。



十返舎一九（明和2年（1767）～天保2年（1831）、享年67歳）

府中（駿府）の武家、重田家に生まれる。江戸に出て武家奉公後、一時大阪で暮らし20歳代末江戸に出て版元の蔦屋で働く。当時流行の戯作を手掛け、黄表紙、洒落本、滑稽本などの作品を次々に出し世間に認められた。「東海道中膝栗毛」はヒット作。画才もあった。

3日目：小田原宿から三島宿（30km） 江戸から112km

小田原宿～三島宿：□□□□□□□□ 到着日： 年 月 日

小田原の宿を出て三島に向かう。箱根の山越えの苦労話はない。途中、江戸に向かおうと色めきたった喜多さん。いい男に見えるよう晒し木綿の手拭で頬かむり。女中衆は笑いこける。喜多さん、色男に出会ったものだと自慢するが越中禪だったという話。途中神田に住んだことがあるという十吉という男と一緒に同行し三島の宿に同宿しようという話になる。夜中、道すがら子供から買ったすっぽんが飛びだし、食いつかれる大騒ぎ。翌日、宿代を支払おうとしたら、十吉がいない。詐欺だった。小銭を集めてやっとのことで宿代を払い。翌朝、沼津へ向かう。



三島女郎浮世絵→

小田原宿：北条早雲が城主となってから相模国の中心としては発展。関所通過前に英気を養うため二泊目の泊りとしたため賑わった。最盛期には100軒もの旅籠があったという。箱根路の甘酒茶屋は現在もある。石畳：道中最大の難所。延宝8年（1680）に1400両の公金をかけて石畳が敷かれた。お土産：箱根寄木細工。

4日目：三島宿から蒲原宿（36km） 江戸から147km

三島宿～蒲原宿：□□□□□□□□ 到着日： 年 月 日

なぐさめ合って沼津へ。茶屋で気のいいお侍に会う。喜多さんが手持ちの印伝を300文で買ってもらう。吉原で蕎麦を食べるが、おかわりできず茶を飲む。新田の名物鰻は食べられず吉原の宿へ、金品をねだる浪人に一文なしだと訴え、逃げる浪人。富士川の渡しを徒歩で渡って、夕闇が迫る頃、やっと蒲原に到着。本陣で食い逃げ。木賃宿、喜多さんが娘の巡礼に夜ばあいをかけるが、なんと宿の婆さん。驚いた喜多さんはスノコを踏み抜いて一階へ落ちた。詫びをいれ300文支払う。



三島宿～沼津宿：三島明神（三島大社）平安期からある。源氏の再興を祈願し成就後に社殿を造営した源頼朝の尊崇が深い。湧水を利用した養殖した鰻が名高い。沼津宿～原宿：千本松原：沼津五反田間の海浜。松原越しに富士山を望み、振り返れば駿河湾を望む景勝地。松陰寺：500年に一度と言われる名僧白隠禅師のお寺。原宿～吉原宿：柏原の鰻が有名。吉原宿～蒲原宿：左富士：東海道中で道の左側に見えるポイント2か所のうちの一つ、名物志ろ酒：

山中の川が白く濁っているのに似ているため、山中白酒と名付けられたという。

5日目：蒲原宿から府中宿（28km） 江戸から 174km

蒲原宿～府中宿：□□□□□□□ 到着日： 年 月 日

由比の宿に入ると、茶屋女たちがやかましく呼び掛ける。砂糖餅だの塩っぼいものあるだのうるさい。朝飯を食わずに宿をでた二人。「呼びたつる女の声はかみそりやさてこそここは髪由比の宿」にわかの大雨が降り、名にしおう田子の浦、清見ヶ関も遠望が利かず、江尻の宿を過ぎたところからようやく雨が府中に到着。宿をとり弥次さんの知人の家を訪問し、借金に成功。安倍川町の遊郭へ。江戸の吉原に似せた造り。



蒲原宿～由比宿～興津宿：さった峠の上り口に鮎、さざえの磯料理屋。清見寺は平安時代の関所。歌枕、道中でも屈指の名古刹。興津宿（興津）～江尻宿：羽衣伝説で有名な三保の松原。江尻宿～府中宿：追分羊羹、駿府城。

6日目：府中宿から岡部宿（13km） 江戸から 188km

府中宿～岡部宿：□□□ 到着日： 年 月 日

安部川で茶店から安部川餅を勧められる夕べ食べたからと断る。安部川の川越人足が昨日の雨で水嵩が高いからと料金交渉、一人64文でまとまる。また雨、鞠子の宿に辿り着く。名物のとろろ汁を注文する。店の夫婦は喧嘩して食べられないまま店を出る。「けんかする夫婦は口をとがらして、鳶とろろにすべりこそすれ」 駿河の難所、宇津の山路に差し掛かる頃から雨が激しくなる、険しい道を辿っていくと岡部宿の客引きが、「川止めになった」という。相良屋という宿に泊る。



府中宿～丸子（鞠子）宿：安倍川餅、鞠子宿～岡部宿：丁子屋のとろろ汁。誓願寺、お羽織屋、宇都山慶龍寺の十団子（団子を白い糸に通し、数珠のような形にして魔除けとした。静岡名物として最近まで静岡駅販売していた。



弥次さんと喜多さん

弥次郎兵衛：もともとノラクラ者。おどけた容貌だが、本人は色男だと思っている。おしゃべりだが、見当はずれである。酒好き。

喜多八：陰間（売れない役者兼男娼）上がり。背が低く品のない容貌でちょっと稼いでもすぐ文無しになる。お調子者で後先考えず先走るタイプ。女好き。

7日目：岡部宿から日坂宿（25.5km） 江戸から 214km

岡部宿～日坂宿：□□□□□ 到着日： 年 月 日

川止めが解け岡部の宿を出立した。街道の賑わいに心うきうきと進み、白子の町で酒と肴はまずくいちゃもん。藤枝宿で田舎親仁と出っくわし馬がはね親仁が、喜多八にぶつかり、馬の小便の水溜りに突き飛ばされて激怒し喧嘩。親仁があやまり茶屋で酒を御馳走するが食い逃げされる。大井川の渡りで、身分を侍と偽りバレる。小夜の中山を下って日坂へ、まだ八つ（午後2時）だが、女の客が多いと気づき泊まることに。巫女に夜ばあいしようとしたがなんと巫女の母親、失敗し一悶着。



岡部宿～島田宿～金谷宿 大井川は：水量により川止めがあった。幕府の命で架橋と渡船が禁じられた。島田宿は川止めになると島田女郎衆のいる旅籠が繁盛した。金谷宿～日坂宿：小夜の中山、歌枕。夜泣き石と水あめ。日坂名

物、わらびもち。

8日目：日坂宿から浜松宿（38.8km） 江戸から 252.3km

日坂宿～浜松宿：□□□□□□□□□□ 到着日： 年 月 日

塩井川来ると昨日の雨で橋が流され皆徒歩で渡っている。二人組の座頭をだまして川を渡ろうとしたが途中でばれ、ずぶぬれに。浜松宿に着き、頼んだ按摩に因縁話を聞く。宿の主人が愛人をつくり、先妻は気が狂って自殺、毎晩、先妻の幽霊が出る話を聞く。夜中、便所へ行く際、庭先の隅に白いものがぼんやり。弥次さん、驚いて大騒ぎ。女中が取り込み忘れた襦袢と判明。 浜松宿浮世絵→



日坂宿～掛川宿：掛川の手織り葛布。掛川城址。袋井宿：袋井の遠州凧。見附宿と浜松宿の間には暴れ天龍と呼ばれた天竜川。日本三大奇祭りといわれる見附天神裸祭り。浜松宿、浜松城の城下町（1568年家康が大改築）と宿場町の二つの面を持つ東海道最大規模の御役町として発展。箱根と並び6軒もの本陣があり、多数の飯盛り女がいた。

9日目：浜松宿から赤坂宿(47km) 江戸から 299km

浜松宿～赤坂宿：□□□□□□□□□□□□ 到着日： 年 月 日

舞阪より対岸の新居へ。浜名湖を渡し舟、無精ひげを伸ばした御仁が蛇を無くしたと大騒ぎ。二川まで籠に乗る。喜多さん、座布団の下に四文銭を発見し猫ババ。新居宿から二川宿までお籠に乗り、宿で鯨飲馬食。御油の松並木で喜多さんを狐と間違えて縛りあげる。 赤坂宿浮世絵→



浜松宿:浜松城:永禄 11 年家康が引馬城を大改修して浜松城と改めた。舞阪宿～新居宿：舞阪より新居へ海上一里：海と繋がった汽水湖で浜名湖。新居（荒井）宿で鰻の蒲焼。新居宿～白洲賀宿：猿ヶ番場の柏餅。二川宿～吉田宿（現豊橋市）城下町と湊町を兼ねた大規模な宿場。御油宿：御油の松並木は両側約 350 本もの松が 600m に渡って続く。弥次喜多が「悪い狐が出る」と教えられた場所。赤坂宿：御油と並んで遊女が多く遊興スポット。

10日目：赤坂宿から宮宿（48km） 江戸から 347km

赤坂宿～宮宿：□□□□□□□□□□□□ 到着日： 年 月 日

岡崎宿は立ち並ぶ茶屋も街並みも華やか、茶屋女から声がかかり、鮎のなますで一杯。池鯉鮒（知立）宿に入った弥次さん、草鞋に足を食われて藁草履を買う羽目に、よく見ると大きさが左右違う。草鞋代を値切って一悶着。弥次さん宮宿の亭主から舟上の小便が心配と訴え竹筒をもらう。夜更け、ごぜに夜ばあいをかけるが盗人だと叫ばれ失敗。 宮宿、熱田神宮→



赤坂宿～藤川宿～岡崎宿（徳川家康が生誕した岡崎城、矢矧の長橋、374m）～知立（池鯉鮒）宿：馬市や木綿市が立つ市場町として栄えた。名物は砂糖餅。鳴海宿：鳴海の有松絞～宮宿

11日目：宮宿から四日市宿（40km） 江戸から 387km

宮宿～四日市宿：□□□□□□□□□□□□ 到着日： 年 月 日

宮より桑名は海上七里の渡し。弥次さん竹筒を使う段になり、船べりから外に出し、用を足すものだが、船内で用を済ませたから大騒ぎ。四日市の貧相な宿、弥次さん暗がりを壁伝いの夜ばあいに出るも、今にも崩れそうな吊り棚を支える羽目に。それを喜多さんに持ち替えさせて女のもとへ。そこには荒菰に包まれたお地藏さん



宮宿～桑名宿：熱田神宮：伊勢神宮につぐ大宮。弥次喜多は寄らずに一目散。宮より桑名へ海上7里。桑名の焼き蛤。

江戸時代の遊女のランク：花魁、格子女郎、散茶女郎、局女郎（吉原では最下位の格付け）。幕府から営業許可を得た飯盛女（本来は給仕）専門職でなく教養や芸がない。旅籠一軒に二人まで。女三助が湯女、垢搔女。川船で客をとる私娼が「舟饅頭」、むしろを抱えて客をとった「夜鷹」「辻君」、最低は主婦が客をとった「地獄」

12日目：四日市宿から松阪宿（39km） 江戸から 426km

四日市宿～松阪宿：□□□□□□□□□□ 歩いた日： 年 月 日

追分へ向かう道中、まんじゅうが名物という茶屋に入る。同席した男から、私もお江戸にいたとき「鳥飼」のまんじゅうを賭食して28食ったことがあるといわれ弥次さん、「鳥飼」は町内、毎日50～60は食っていると賭け食いし負ける。あとで、有名な手品師と判る。津に入り弥次さん、十返舎一九を騙りこんやくを御馳走になるなど歓待されるが嘘がばれ、ほうほうの態で逃げ出す。松阪宿浮世絵→



四日市宿：四日市より追分（東海道と伊勢参宮街道の分岐点）まで50丁。杖つき坂（東海道の中でも急な坂として名高い）。日本武尊が「吾が足三重のまがりのごとくしてただ疲れたり」と言ったので、これが三重県発祥の地と言われるとか。追分～白子へ2里27丁。白子～津へ3里半。津～松阪へ4里。

13日目：松阪宿から山田（22km）江戸から 448km

松阪宿～山田：□□□□□ 歩いた日： 年 月 日

松阪の木賃宿を早朝に出立。明星の茶屋で休んでいると、上方の者が山田の妙見町に泊まって、古市の遊びをおごると言われ一緒する。妙見町の隣はすぐ古市、娼家が軒を並べ、伊勢音頭の三味線が勇ましく流れ、千束屋という妓楼に入る。上方者と美人の相方を折り合うなど一悶着。

古市は外宮と内宮の間に位置する伊勢最大の歓楽街、最盛期には1000人以上もの遊女がいた。大広間で踊る名物・伊勢音頭。

写真は伊勢古市備前屋の踊りの図



14日目：内宮、外宮参拝、江戸から 454km

内宮～外宮：8km □□ 祝 完歩日： 年 月 日

内宮（天照大神を祀る本殿。第11代垂仁天皇の時代に創建されたとされる）外宮（天照大神の食事を司る豊受姫神を祀る。第21代雄略天皇の時代に創建されたとされる）

弥次さん、喜多さんはこのあと京都へ向かったが、京の記述はあるが、伊勢から先の記述はない。

伊勢で是非とも食すべきとされたのが、伊勢うどん、赤福もちである。

お伊勢参り大部分の人は伊勢講の代表者と来ている。故郷への御土産として、好まれたものは、杉原紙、鳥子紙、油煙（炭）、帯、櫛、海苔、伊勢暦、万金丹。



お伊勢参り

お伊勢参りの多くは「伊勢講」による団体旅行でした。伊勢講という団体をつくりお金をためて順番に、あるいは全員でお参りする。また、「ぬけ参り」といい、女子供や店者などが、親や主人に無断で伊勢参りすることが、一生

に一度だけ見逃された。無一文で旅立っても道中に施しを受けながら旅することができた。また伊勢参りに欠かせないのが「御師（おし）」御祈祷師の略。伊勢参りの仲介役でガイド、旅行業者のような役割を果たした。藤沢から伊勢参りの記録としては、藤沢市史に掲載されているもの。「伊勢参宮紀行」（文政 11 年（1828）平野新蔵著、「伊勢参宮道中日記帳」（文政 11 年 三觜八郎右衛門著等がある。

参考にした図書：「東海道中膝栗を旅しよう」、田辺聖子。 「東海道中膝栗毛の旅」人文社)

「東海道中膝栗毛 お江戸を沸かしたベストセラー」 安岡章太郎

注 1：知れば知るほど面白い伊勢参宮の実態 酒井郁子 藤沢地名の会会報第 103 号

注 2：「完全東海道五十三次ガイド」 初版 東海道ネットワークの会